

タイにおける  
ミャンマー難民の状況・支援活動  
現地調査報告

平成18（2006）年4月

（財） アジア福祉教育財団 難民事業本部

# 目 次

<b>調査概要</b> .....	4
Ⅰ. 目的 .....	4
. 調査団員 .....	4
. 日程及び面談者名 .....	4
<b>調査結果（要約）</b> .....	6
<b>調査結果</b> .....	9
Ⅰ. <b>ミャンマー難民発生の背景</b> .....	9
1. ミャンマーの人口、人種等 .....	9
2. イギリスの植民地時代 .....	9
3. 独立前後 .....	9
. <b>ミャンマー難民の状況と国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の活動</b> .....	10
1. タイにおけるミャンマー難民の推移 .....	10
2. 難民キャンプの状況 .....	11
. <b>タイ政府のミャンマー難民にかかる政策</b> .....	12
1. 難民の登録について .....	12
2. 第三国定住にかかるタイ政府の対応 .....	13
3. ミャンマー難民の第三国定住の状況 .....	13
. <b>ミャンマー難民の今後の動向</b> .....	14
. <b>Thailand Burmese Border Consortium(TBBC)の活動</b> .....	15
1. 概要 .....	15
2. 主な支援内容 .....	15
3. 2006年の予算 .....	15
4. メーラ難民キャンプにおけるTBBCの活動 .....	15
. <b>訪問した難民キャンプの状況</b> .....	16
1. タム・ヒン難民キャンプ .....	16
( 1 ) 難民キャンプの概要 .....	16

( 2 ) 難民キャンプの特徴 .....	16
( 3 ) 訪問先別概要 .....	17
2 . メーソット地域の難民キャンプの状況 .....	20
( 1 ) メーソット地域の難民の状況 .....	20
( 2 ) メーソット地域の難民キャンプの第三国定住について .....	21
3 . メーラ難民キャンプ .....	21
( 1 ) 難民キャンプの概要 .....	22
( 2 ) 難民キャンプの支援活動 .....	27
( 3 ) 今後の課題・ニーズ等 .....	32
. <b>シャンティ国際ボランティア会の図書館活動</b> .....	34
1 . 活動を開始した背景 .....	34
2 . 現状 .....	36
3 . タム・ヒン及びメーラ難民キャンプにおける図書館活動 .....	37
4 . 今後の課題等 .....	38
. <b>ミャンマー難民へのインタビュー結果</b> .....	38
1 . タム・ヒン難民キャンプにて .....	38
2 . メーラ難民キャンプにて .....	39
. <b>資料</b> .....	42
1 . Thailand Atlas Map	
2 . Resettlement of Myanmar Refugees By Country of Resettlement (1 January to 31 December 2005)	
3 . Myanmar Thailand Border Refugee population by gender, As at end May 2005	
4 . CCSDPT Agency Services To Burmese Border Camps – June 2005	
5 . Structure of Relief Assistance	
6 . Structure of Refugee Camp Local Administration	
7 . CAMP PROFILE: THAM HIN CAMP	
8 . Tham Hin Temporary Shelter (In Brief)	
9 . CAMP PROFILE: MAE LA CAMP	
10 . MAE LA CAMP PROFILE THAILAND BURMA BORDER CONSORTIUM	

# 調 査 概 要

## ．目的

当事業本部では、1999年4月に、日米 NGO 共同難民支援プロジェクトへの参加の可能性を探る調査をバンコク、及びタイ東部のミャンマーとの国境地域の難民キャンプにおいて実施し、同調査を踏まえて SVA（シャンティ国際ボランティア会）がミャンマーとの国境地域の難民キャンプで図書館活動を開始した。その後、2001年3月にタイ国内のミャンマー・カレン族難民の状況・支援活動及び SVA の図書館活動の状況調査（フォローアップ調査）を実施したが、同調査以降も、タイにおけるミャンマー難民の状況は変化しており、最新の状況では必ずしも難民の帰還が始まる状況ではないが、複数の日本の NGO がミャンマー難民の支援及び将来の帰還にかかる支援活動に関心を示している。また、SVA は現在タイ国内にある 7 ヶ所の難民キャンプで図書館活動を実施しており、活動内容も充実させている。

そこで当事業本部としては、タイ国内のミャンマー難民キャンプの状況、UNHCR 等の国際機関、NGO 等の活動状況を調査・把握するとともに、難民の状況等に関する情報を日本の NGO へ提供し、今後、日本の NGO がミャンマー難民に対する支援活動を検討する際の参考として活かすと共に、日本に滞在するミャンマー難民に対する支援活動の参考として活かすことを目的として、調査を行った。

## ．調査団員

- 1 アジア福祉教育財団難民事業本部 本部長 福 川 正 浩
  - 2 アジア福祉教育財団難民事業本部 援護第一係長 小 村 真 名 子
  - 3 専門調査員 榎 川 勝 也  
(日本 UNHCR 協会事務局長)
  - 4 専門調査員 若 山 聡  
(社団法人 シャンティ国際ボランティア会 国内事業課絵本を届ける運動担当)
  - 5 専門調査員 黒 木 彩 子  
(特定非営利活動法人 ブリッジ エーシア ジャパン海外事業部)
  - 6 専門調査員 村 田 真 一  
(特定非営利活動法人 日本紛争予防センター事務局長)
- 以上 6 名

## ．日程及び面談者名

平成 18 年 2 月

12 日 (日) 成田発

バンコク着

13 日 (月) タム・ヒン (Tham Hin) 難民キャンプ訪問

Camp Committee

学校

Further Study Class (CPU)

SVA 図書館

難民のインタビュー

- 職業訓練事務所  
教育関係者との面談
- 14日(火) UNHCR Workshop 参加  
Thailand Burma Border Consortium(TBBC)  
面談者: Ms. Sally Thompson, Deputy Executive Director  
日本大使館訪問  
面談者: 小林秀明特命全権大使、小山裕基一等書記官
- 15日(水) UNHCR タイ事務所訪問  
面談者: Mr. Bernard E.H.Quah, Assistant Regional  
Representative (Operations)  
バンコク発 (航空機) スコータイ (Sukhothai)  
スコータイ (車両で約3時間) メーソット
- 16日(木) UNHCR メーソット地域事務所訪問  
面談者: Ms. Elizabeth Kirton, Head of Field Office  
Ms. Ayana Hudayverenove, Assistant Field Officer  
Thailand Burma Border Consortium (TBBC) メーソット事務所  
訪問  
面談者: Mr. Chris Clifford, Field Coordinator  
SVA メーソット事務所訪問  
面談者: 中原亜紀ミャンマー難民事業事務所長
- 17日(金) メーラ (Mae La) 難民キャンプ訪問  
Camp commander  
Camp committee  
ZOA のプロジェクト  
面談者: Mr. Marc van der Stouwe, Program Manager Karen  
Education Project  
Mr. Hans Odijk, Program Manager Vocational  
Training Project  
中等教育、情緒教育クラス、職業訓練指導者養成講座を訪問  
KWO (Karen Women's Organization)  
難民のインタビュー  
COERR (Catholic Office for Emergency Relief and Refugees)  
Peace education training  
SVA 図書館
- 18日(土) メーソット (車両で約3時間) スコータイ  
スコータイ発 (航空機) バンコク着
- 19日(日) バンコク発  
成田着

# 調査結果

## (要約)

### 1. タイ国内のミャンマー難民の状況

- (1) タイ国内には9カ所の難民キャンプがあり、2006年1月末の難民の総数は Thailand Burma Border Consortium(TBBC)の資料によると143,531人である。TBBCの難民総数は、TBBCによる食糧等の援助を実質的に受領している数であり、国連難民高等弁務官事務所(UHCR)が関与していないシャン族の難民キャンプ(滞在者数607人)も含む。UHCRによる難民の登録者数は、126,440人であり、また、10,639人の未登録者がいる。(2006年3月6日現在)。
- (2) 難民キャンプには現在も多くの難民が流入しており、キャンプの敷地を拡張することはできず過密であり、特に水の確保・衛生状況は厳しい。
- (3) 難民キャンプはタイ政府内務省が管理しており、難民自身はキャンプ委員会を設立し、議長、書記官の他、食糧・配給委員会、水・衛生委員会、保健・医療委員会、教育委員会、図書館委員会、キャンプ内問題委員会があり、自治管理をしている。
- (4) 難民はキャンプの外へ出ることが認められておらず、基本的にはNGO等から提供される支援に頼って生活している。
- (5) キャンプ内において職業訓練、タイ語・英語教育、を行うことをタイ政府は認めていなかったが、2年前から認められるようになった。
- (6) 難民が指摘している問題点は、キャンプ内では10年間の教育を終了後、教育、雇用の機会がなく、将来の展望がない状況にある点である。これに関して UNHCR と Coordinating Committee for Services to Displaced Persons in Thailand(CCSDPT)は、職業訓練と収入を得る機会の提供、10年間教育終了後の青少年への更なる教育の機会の提供、キャンプ外での雇用機会の提供の3点をタイ政府に提案している。

### 2. タイ政府の難民にかかる政策

- (1) タイ政府(難民条約に加盟していない)は、1984年よりミャンマーから越境してくる難民を Displaced Person (DP)として難民キャンプを作り、その中で生活することは認めているが、タイへの庇護国定住は認めておらず、恒久的解決策は帰還奨励を原則としていた。
- (2) 第三国定住にかかるタイ政府の対応
  - (イ) 2004年の初め頃より、アメリカはタイ政府及び UNHCR とミャンマー難民の受け入れに関して話し合いを始め、当初は都市部(バンコク及びメーソット)に滞在する Person of Concern(POC)(注)を対象としていたが、2005年7月より、タイ政府は、キャンプ滞在者の第三国定住を認めるようになった。タイ政府は、以前は、第三国定住を促進すると、第三国定住を目的とした新たなミャンマー難民の流入を招くことを懸念して認めていなかったが、難民の流入が続く状況を踏まえ、方針を転換した。(注; UNHCR が認定した援助対象者)

なお、都市部在住の POC を含め、ミャンマーより流入する不法滞在者の難民登録の問題については、2002年より、タイ政府と UNHCR との間で協議が行われ、二転三転した。しかし、昨年(2005年)タイ政府が、UNHCR が主張する緩い基準に同意

し、Provincial Administration Board(PAB)による認定作業が現在進んでおり、キャンプ在住の認定者数が大幅に増えている。

### 3 . 第三国定住の状況

#### ( 1 ) アメリカ

(イ)アメリカは2004年よりタイに滞在しているラオ・モン族15,000人を受け入れたところ、同年より、ミャンマー難民の解決策として、タイ政府及びUNHCRと第三国定住に関して話し合いを始めた。

(ロ)難民の受け入れについて、2005年は都市部在住のPOCを中心に1,313人を受け入れた。

(ハ)2005年末に、タム・ヒン難民キャンプ(注)に滞在する難民をアメリカが受け入れることを公表した。同難民キャンプに滞在する約9,000人について、希望すれば全員を受け入れるとしている(UNHCRの調査では89%が希望している)。難民事業本部の調査団が難民より聴取したところによれば、仏教徒を中心に米国行きを希望しない者もいる。

(注)1997年に開設された最も新しいキャンプ。2000年に緒方国連難民高等弁務官(当時)がタム・ヒン難民キャンプを訪問し、その狭さと、条件の劣悪さに驚き、記者会見でも言及した。アメリカの受け入れ対象としてUNHCRが推薦した。タイ政府はこれ以上難民が流入しないように意図的に狭い場所しか提供していないと言われているが、それでも流入が続いている。

#### ( 2 ) オーストラリア

オーストラリアについては、難民自身が個別にオーストラリア大使館に難民申請をしている。2005年は288人の難民を受け入れた。

#### ( 3 ) その他の欧州諸国等

スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、デンマーク、英国、カナダ及びニュージーランドも第三国定住として受け入れを実施しており、2005年は785人受け入れた。欧州諸国はメーソット近郊の難民キャンプに滞在する難民を今年は2,000人程度受け入れると予想されるが、メーソット近郊の3難民キャンプに滞在する難民総数は約75,000人であり、従って、大多数の難民は引き続きキャンプでの滞在が続くことになる見込み。

### 4 . 難民キャンプにおけるシャンティ国際ボランティア会(SVA)の図書館活動

( 1 ) 1999年の難民事業本部の現地調査の結果、2000年にメーホンソン県にある2カ所の難民キャンプで児童を対象とした図書館活動を開始した。2005年までに7カ所の難民キャンプで22館を開設運営している。絵本をカレン語、ビルマ語に翻訳して閲覧、貸し出しを行っているが、さらに図書館が伝統文化の継承の拠点、特に青少年の民族のアイデンティティーを継承できる拠点となるような活動に広げている。

( 2 ) 第二フェーズである2004年以降は、児童向けの図書館活動に加えて、伝統楽器の学習、絵画等の情緒教育、青少年及び大人を対象とした図書館活動、高齢者のための活動、民話の聞き取り・民話の冊子作成等、言葉・文化の継承の活動、世代間の交流活動にも力をいれており、図書館が図書館活動とともに、コミュニティーセンターと

しての役割も果たしている。

( 3 ) 2006 年は、メラウ難民キャンプに新たに 1 カ所の図書館開設 ( 同キャンプ内の図書館は合計 4 カ所となる )、再統合・移転予定のキャンプにおいても 2 カ所の図書館を開設予定である。

( 4 ) 昨年まで、現地活動費は全額 UNHCR が負担していたが、今年から UNHCR の負担は大幅に ( 70% ) 削減されたので、外務省に補助申請を行っている。



# 調 査 結 果

## ・ ミャンマー難民発生の背景

タイ国内の難民キャンプに滞在するミャンマー難民は主に、カレン族(65%)、カレニ族(18%)、その他であり、タイ国内におけるミャンマー難民の発生の背景は、ミャンマーにおける少数民族の状況と深く関係している。

### 1 . ミャンマーの人口、人種等

ミャンマーの人口は約5,217万人と推定されており、ビルマ族が約70%を占め、その他は少数民族である。主な民族は、カレン族、シャン族、ラカイン(アラカン)族、モン族、チン族、カチン族、カヤ族等であり、細かく分けると135民族と言われている。

### 2 . イギリスの植民地時代

- (1) ビルマは1886年に全土がイギリスの植民地となった。イギリスはDivide and Rule(分割統治政策)による統治を行い、トップは英国人、行政はインド人を使い、カレン族を警察及び軍人として徴用し、ビルマを統治した。この分割統治政策は今日のビルマ族と、カレン族の対立の要因となっている。
- (2) 植民地時代のキリスト教の布教活動により、カレン族の中にはキリスト教に改宗する者がおり、ビルマ族により抑圧されていたカレン族はイギリスの統治に協力をした。他方、ビルマ族は仏教徒であり続けた。

### 3 . 独立前後

- (1) 1947年2月にピンロン(シャン州の東部)においてイギリスからの独立を指導していたアウンサン将軍が少数民族と会談(ピンロン会合)し、10年後に自治権を与えることを約束したが(ピンロン条約)、同将軍は同年7月に暗殺された。なお、カレン族は同会合には発言権のないオブザーバーとして出席したに過ぎない。
- (2) 1948年にビルマはイギリスから独立したが、当時のビルマ政権は国内の少数民族に対してビルマ族と同等の権利を認めなかった。そのため、カレン族はカレン民族同盟(Karen National Union; KNU)を中心に民族の分離独立を要求したが、受け入れられず、1949年に武装蜂起をした。
- (3) 1988年までのネ・ウィン時代には、ミャンマー政府とKNUをはじめとする少数民族組織との和平には進展がなかったが、1992年にミャンマー政府が一方向的に少数民族組織に対する攻撃を停止する旨を発表し、KNUを除く少数民族組織との停戦合意が実現した。
- (4) ミャンマー政府軍と民主カレン仏教組織(Democratic Karen Buddhist Army; DKBA)により1995年にKNUの拠点であるマナブローが陥落し、カレン州の農村に影響を与えた。また、多くのKNU関係者がタイ国内へ避難した。
- (5) ミャンマーからの難民の流出が現在も続いている理由は、ミャンマー軍による攻撃、人権侵害(村の焼き討ち、略奪、強制労働、強制ポーター、強制移住、女性へのレイプ等)である。

- (6) なお、調査団が面談した KNU 幹部は、ミャンマー軍と口頭による停戦合意があると申述した。

## ・ミャンマー難民の状況と国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR)<sup>1</sup>の活動

### 1. タイにおけるミャンマー難民の推移

- (1) タイ国内におけるミャンマー難民の流入が確認されたのが、1984 年の 9,500 人であり、10 年後の 1994 年には約 8 倍の 77,100 人に増大した。当調査団が訪問したメーラ (Mae La) 難民キャンプは、1984 年に 2,300 人が確認され、1994 年には約 6,200 人に増大している。
- (2) 1995 年には KNU の支配地域のカレン州の首都であるマナブローが陥落したため、多くの KNU 関係者がタイ国内へ避難した。
- (3) 1996 年以降もミャンマー政府軍による村全体の強制移住などが続いており、多くの人々がタイへ避難している。主にカレン族であるが、シャン族もいる。また現在のミャンマー国内の国内避難民は 50 ~ 60 万人と推定されている。
- (4) UNHCR とタイ政府の県難民認定委員会 (Provincial Admission Board ; PAB) の合意による難民の登録は 2001 年末に中止されたが、2004 年 12 月に再開され、現在も登録が進んでいる。
- (5) 都市部在住の Person of Concern (POC)<sup>2</sup>を含め、ミャンマーより流入する不法滞在者の難民登録の問題については、2002 年より、タイ政府と UNHCR との間で協議が行われ、二転三転した。タイ政府は従来、認定の基準を「戦闘から逃れた者」としていたが、2005 年に UNHCR が主張する緩い基準「迫害もしくはその他の理由から逃れた者」に同意し、PAB による認定作業が現在進んでおり、キャンプ在住の認定者数が大幅に増えている。

---

<sup>1</sup> UNHCR タイ地域事務所の特徴

1998 年に設立された。難民キャンプは、基本的には、タイ政府 (難民条約に加盟していない) の管理下にあり、UNHCR は、主として難民保護 (Protection) の分野を担当、教育・職業教育・衛生医療などについては 10 以上の NGO との協業 (パートナーシップ) で行っている。

バンコクに地域事務所のほか、カンチャナブリ、メーソット、メーホンソンに現地事務所がある。

UNHCR は、NGO と協力して、また、内務省や難民によるキャンプ委員会と協力して、人権、ジェンダー、法律、コミュニティー管理などの教育を行っている。

<sup>2</sup> UNHCR が認定した援助対象者。

(6) ミャンマー難民数の推移

年	UNHCR	Thailand Burma Border Consortium (TBBC)のタイ国内の支援者総数(当事業本部の調査により情報収集)
1994	83,422	
1995	94,910	
1996	104,033	
1997	105,216	
1998	101,686	88,190
1999	99,916	
2000	104,569	98,421
2001	110,313	
2002	112,238	
2003	118,762	
2004	119,330(注1)	
2005年5月	120,132 未登録者を含めて約14万人 としている。(注2)	145,687 (623人のシャン族を含む)

(注1) バンコクに滞在する Urban Refugee 2,310人を含む。

(注2) UNHCR とタイの地方委員会である PAB との協力による難民登録は 2001 年に中止されたが、2004 年 12 月に再開され、2005 年にタイ政府は UNHCR が主張する緩い基準に同意し、認定作業が現在進んでおり、UNHCR の登録者数は Thailand Burma Border Consortium(TBBC)の支援者総数に近い数字になると思われる。

## 2. 難民キャンプの状況

難民の支援に関する略図参照(44頁資料)

- (1) タイ国内には9カ所の難民キャンプがあり、UNHCR による難民の登録者数は、126,440人であり、また、10,639人の未登録者がいる。(2006年3月6日現在)。他方、TBBC(参照)の支援対象者は143,531人であり、TBBCによる食糧等の援助を実質的に受領している人数で、UNHCR が関与していないシャン族の難民キャンプ滞在者数(607人)も含む。
- (2) 難民キャンプには多くの難民が現在も流入しており、キャンプの敷地を拡張することはできず過密であり、特に安全な水の確保が厳しく、衛生状況は劣悪である。
- (3) 難民キャンプはタイ政府内務省が管轄<sup>3</sup>しており、難民自身はキャンプ委員会を設立し、議長、書記官の他、食糧・配給委員会、水・衛生委員会、保健・医療委員会、教育委員会、図書館委員会、キャンプ内問題委員会を組織して、自治管理

<sup>3</sup> タイ政府(内務省、警察、軍)の役割。タイ政府は難民キャンプ内に入れるが、タイ国軍は通常キャンプ外にいる。内務省は、カンチャナブリの2キャンプにおいてはキャンプ外に、メーソットの3キャンプにおいてはキャンプ内に滞在している。

をしている。

- (4) 難民はキャンプの外へ出ることが認められておらず、基本的には NGO 等から提供される支援に頼って生活している。他方、TBBC、ZOA (教育支援を行っているオランダの NGO) など主な NGO は 2006 年の予算が大幅に減額され、食糧配給の削減など厳しい状況にある。
- (5) キャンプ内において職業訓練、タイ語・英語教育、を行うことをタイ政府は長年認めていなかったが、2 年前からいずれも認めるようになった。さらに難民が仕事をして収入を得ることができるようにするため、職業教育及び高等教育に関して、タイ政府と UNHCR や NGO との話合いが現在行われている。

なお、2003 年に UNHCR の親善大使のアンジェリーナ・ジョリー氏が、タム・ヒン (Tham Hin) 難民キャンプに、難民の職業教育のため 10 万ドルの寄付を行い、UNHCR タイ事務所が、タイ政府と 8 ヶ月に亘り交渉した結果、裁縫・編み物・料理・自動車修理などの職業教育が行えるようになった。
- (6) 難民が指摘している問題点は、キャンプ内では 10 年間の教育を終了後、教育、雇用の機会がなく、将来の展望がない状況にある点である。これに関して UNHCR と Coordinating Committee for Services to Displaced Persons in Thailand (CCSDPT) は、職業訓練と収入を得る機会の提供、10 年間教育終了後の青少年への更なる教育の機会の提供、キャンプ外での雇用機会の提供をタイ政府に提案している。

## ・タイ政府のミャンマー難民にかかる政策

### 1. 難民の登録について

- (1) タイ政府 (難民条約に加盟していない) は、1984 年よりミャンマーから越境してくる難民を Displaced Person (DP) として難民キャンプを作り、その中で生活することは認めているが、タイへの庇護国定住は認めておらず、恒久的解決策は帰還奨励を原則としていた。
- (2) 2003 年 7 月、タイのタクシン首相は、首都バンコクでミャンマー人のデモにより、バンコク不法滞在のミャンマー人が多くいることを認識し、同年 12 月に、UNHCR に対し、こうしたミャンマー人を、難民キャンプに移すよう要請した。
- (3) 2003 年以降、不法移民に対し、厳しい取締りが始まり、2004 年 12 月に、Refugee Status Determination (RSD) を停止し、ミャンマーから流入する者については、新たに難民としては認めない方針を表明した。その後、同不法滞在のミャンマー難民の UNHCR への登録について、当初は 2004 年 4 月までとしたが、その後、3 回の延長を繰り返している。最終的期限は 2006 年 3 月末となっている。
- (4) 2005 年に、タイ政府は、UNHCR が主張する緩い基準に同意し、PAB による認定作業が現在進んでおり、キャンプ在住の認定者数が大幅に増えている。例えば、タム・ヒン、バンドンヤン、ヌポ (Nu Po) の 3 つの難民キャンプで、2005 年に約 1,900 人の難民登録をした。また、タム・ヒン難民キャンプでは、過去 2、3 ヶ月の間に約 1,800 人の難民登録を行った。
- (5) 2006 年 3 月末に難民登録期限を迎えるが、本調査時点で、難民登録待機中の人々が約 10,000 人、また、非登録の人が約 22,000 人いると推定されている。

## 2. 第三国定住にかかるタイ政府の対応

- (1) 2004年の初め頃より、アメリカはタイ政府及びUNHCRとミャンマー難民の受け入れに関して話し合いを始め、当初は都市部(バンコク及びメーソット(Mae Sot))に滞在するPOCを受け入れの対象としていたが、2005年7月より、タイ政府は、キャンプ滞在者の第三国定住を認めるようになった。タイ政府は、以前は、第三国定住を促進すると、第三国定住を目的とした新たなミャンマー難民の流入を招くことを懸念して認めていなかったが、難民の流入が続く状況を踏まえ、方針を転換した。
- (2) 2003年末までにUNHCRによって認定されたバンコク及びメーソット等に滞在するPOCは約2,000人であり、また、POCの資格を求めていたが、保留となっている人が約2,000人である。(Human Rights Watchの報告)
- (3) ミャンマーより流入する都市部の不法滞在者の難民登録の問題については、2002年より、タイ政府とUNHCRとの間で協議が行われてきたが二転三転している。ミャンマーへの帰還の見通しが不明中、タイ政府は、ミャンマー難民の解決策として、UNHCRと第三国定住に関して話し合いを始めた。
- (4) タイ政府が第三国定住を認めた理由は以下が考えられる。
  - (イ) 2004年10月にミャンマー政府のキン・ニュン首相が更迭され、その後ミャンマーの民主化が進展せず、タイへのミャンマー難民の流入が続いており、当面ミャンマーへ帰還する見込みがないこと。
  - (ロ) キン・ニュン更迭により、タクシン首相はミャンマー政府とのパイプを失ったこと。
  - (ハ) タイ政府としては、引き続き国内に受け入れたくないのに、増大する難民の扱いで国際的批判を受けることのないようにする為、現在は第三国出国を望んでいること。

## 3. ミャンマー難民の第三国定住の状況

- (1) アメリカ
  - (イ) アメリカは2004年よりタイに滞在しているラオ・モン族15,000人(UNHCRの援助対象者ではない。)を受け入れたところ、同年より、ミャンマー難民問題の解決策として、タイ政府及びUNHCRと第三国定住に関して話し合いを始めた。
  - (ロ) 難民の受け入れについて、2005年は都市部在住のPOCを中心に1,313人を受け入れた。
  - (ハ) 2005年末に、タム・ヒン難民キャンプ<sup>4</sup>に滞在する難民をアメリカが受け入れることを公表した。同難民キャンプに滞在する約9,000人について、希望すれば全員を受け入れるとしている(UNHCRの調査では89%が希望している)。難民事業本部の調査団が難民より聴取したところによれば、仏教徒を中心に米国行きを希望しない者もいる。

<sup>4</sup> 1997年に開設された最も新しいキャンプ。2000年に緒方貞子国連難民高等弁務官(当時)がタム・ヒン難民キャンプを訪問し、その狭さと、条件の劣悪さに驚き、記者会見でも言及した。アメリカの受け入れ対象としてUNHCRが推薦した。タイ政府はこれ以上難民が流入しないように意図的に狭い場所しか提供していないと言われているが、それでも流入が続いている。

## (2) オーストラリア

オーストラリアについては、難民自身が個別にオーストラリア大使館に難民申請をしている。2005 年は 288 人の難民を受け入れた。

## (3) その他の欧州諸国等

スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、デンマーク、英国、カナダ及びニュージーランドも第三国定住として受け入れを実施しており、2005 年は 785 人を受け入れた。欧州諸国はメーソット近郊の難民キャンプに滞在する難民を今年は 2,000 人程度受け入れると予想されるが、メーソット近郊の 3 難民キャンプに滞在する難民総数は約 75,000 人であり、従って、大多数の難民は引き続きキャンプでの滞在が続くことになる見込み。



第三国定住希望者とのインタビュー

## ・ミャンマー難民の今後の動向

UNHCR の資料によるとミャンマー難民の 2005 年の第三国定住の合計は、2,368 人(41 頁資料参照)である。

2006 年にはタム・ヒン難民キャンプの滞在者の米国への出国が進むと考えられ、また、欧州諸国はメーソット近郊の難民キャンプから 2006 年には 2,000 人程度を受け入れる予定である。

第三国定住受入者は、米国は本人の希望によるとしているが、欧州諸国は英語の能力、定住後の統合の可能性を鑑みて選択していることから、難民キャンプにおいては、リーダー、高校の校長、英語教師、看護師等の専門職が出国することとなり、残される難民のコミュニティではリーダー不在等がおこる懸念がある。

現在もミャンマーからの難民の流入が続いていること、当面ミャンマーへの帰還が見込まれないことから、第三国定住が促進されても、難民の数が急激に減少するとは考えにくく、難民は引き続きキャンプに滞在することになる。

TBBC の職員は具体的に出国できる人数は年間 13,000 人程度と見ており、難民キャンプ滞在者全員を出国させるためには、最短でも 10 年を要すると述べた。

なお、難民キャンプの統合・移転の計画はあるが、現在の過密な状況が改善される

かは不明である。

## ・ Thailand Burma Border Consortium (TBBC) の活動

### 1 . 概要

( 1 ) 1984 年 ( ミャンマーからの難民の流入が確認された年 ) にミャンマーからの避難民を支援するために設立された人道支援のための NGO の連合 ( Alliance ) であり、2005 年には 10 の NGO が参加し、食糧配布及び身体的安全を確保するための支援活動を実施している。

参加 NGO は以下のとおり。

Christian Aid、 Christian World Service Australia、 Church World Service、 Diakonia、 Dan Church Aid、 Interchurch Organization for Development Cooperation, Netherlands ( ICCO )、 International Rescue Committee、 Norwegian Church Aid、 Thailand Baptist Missionary、 ZOA Refugee Care Netherlands

( 2 ) タイの NGO であるが、英国人の代表以下欧米人が主体であり、EU40%、アメリカ 15%、カナダ、北欧等の政府の資金援助を受けている。政府資金は、それぞれの国の NGO へ提供される。

( 3 ) 事務所はバンコクその他、メーホンソン、メーサリアン、メーソット、及びサンカブリにあり、国際職員は 30 人、地元職員は 36 人である。

( 4 ) 支援内容は、食糧、シェルター、調理用燃料、救援物資等の配布であり、性差、宗教、民族の区別なく支援し、また難民キャンプ周辺の住民への適切な支援活動を実施し、住民へのネガティブな影響を最小限にとどめるよう努力している。

### 2 . 主な支援内容

#### ( 1 ) 食糧

2005 年は一人当たり 2,270 キロカロリー ( UNHCR の基準は 2,100 キロカロリー ) の食糧配布を確保し、栄養失調の児童は 3.6% ( UNHCR の基準は 5 % 以下 ) である。

#### ( 2 ) 食糧以外の配布物品 ( Non-food Items )

シェルターの屋根のカヤ及び調理のための燃料を配布している。

( 3 ) 食糧の確保のために、地域の環境に配慮した園芸・野菜栽培の指導者の養成をカレニー族の難民キャンプでパイロットプロジェクトとして実施している。

( 4 ) 所得創出につながる職業訓練として、縫製訓練 ( ロンジーの製作 ) を支援している。

### 3 . 2006年の予算

過去の 22 年間の支援活動の中で、初めて 2006 年は必要な資金調達ができおらず、食糧をはじめとする基本的支援を減額しなければならない恐れがある。支援活動のための予算は約 4,000 万ドルであるが、200 万ドル不足している。

### 4 . メーラ難民キャンプにおける TBBC の活動

( 1 ) 食糧、シェルター及び救援物資等の配布をしている。

配布している具体的な食糧等は、米、塩、魚の練り製品、チリ、豆、調理用油脂、強化粉、調理用燃料である。

シェルター関連では、竹、屋根用の葉、その他、毛布、カヤ、マットを配布。

また、調理器具、ポット、調理用かまど（七輪のような形状）を配布している。

- (2) 栄養プログラムは、すべての滞在者が基本的な食糧を得られるようにすること、及び社会的弱者に補助食品を提供している。
- (3) 食糧確保のために、有機栽培、環境・エネルギーに配慮した園芸・野菜栽培の指導者訓練、及び種・栽培用具・フェンスの材料等を配布している。
- (4) 難民の自治組織であるキャンプ委員会（Camp Committee）のメンバーに対し、キャンプ内外の問題に対処するための支援を実施している。
- (5) キャンプ内のコミュニケーションの強化を支援している。具体的にはキャンプ委員会のメンバーと各種の活動をしているコミュニティーグループとの関係強化につながる支援を実施している。

## ・訪問した難民キャンプの状況

### 1. タム・ヒン難民キャンプ

#### (1) 難民キャンプの概要

- (イ) 同キャンプはタイとミャンマーとの国境から約 12km、ラチャブリ（Ratchaburi）県の周囲を山に囲まれた丘陵地帯にあり、広さは約 64 である。バンコクからは車で約 3 時間。
  - (ロ) 同キャンプは Karen National Union（KNU）の支配下にあったカレン州テナセリム川（Tenasserim River）沿いの約 50 の村から、ミャンマー軍の攻撃を逃れてきた人々を保護するために 1997 年 6 月に設立された。
  - (ハ) ミャンマーから逃れてきた当初は、国境に近い 3 つのキャンプ（Bowi, Huay Sut, Pu Maung）に分かれて住んでいたが、安全上の懸念から 1997 年 5 月から 6 月にかけて現在の場所に移った。
- (ニ) TBBC によると、2006 年 1 月現在キャンプに滞在し、食糧などの配給を受けている人は 10,367 人<sup>5</sup>で、2005 年 12 月から約 600 人増えている<sup>6</sup>。男女の内訳は男性 5,200 人、女性 5,167 人。民族別に見ると、95% がスゴー・カレン族、残りの 5% がビルマ族やモン族である。宗教別の構成は、83% がキリスト教徒、10% が仏教徒、7% がアニミズム信仰で、イスラム教徒も少数居住している（キャンプ委員会による）。

なお、UNHCR が公表している Camp Profile（46 頁資料参照）と多少異なる。

#### (2) 難民キャンプの特徴

##### (イ) 劣悪な居住環境

同キャンプはタイのミャンマー難民キャンプの中で最も人口密度が高く、

<sup>5</sup> UNHCR の Camp Profile によると、PAB に登録されている難民は 2006 年 2 月現在 9,564 人。

<sup>6</sup> UNHCR カンチャナブリ事務所のベンジャミン氏によると、2005 年の半ばに PAB が 1998 年の第 1 回目以来始めて開かれ、難民の新規登録が行われた。一方、2005 年 11 月以降に到着したこれらの難民については、タイ政府には正式に登録されていない。



居住環境が劣悪であることで知られる。2000年には緒方貞子国連難民高等弁務官（当時）が同キャンプを訪れ、記者会見で窮状を訴えた。

平均6人の家族に与えられたスペースは5㎡で、キャンプの広さに関する国際的な基準を満たしていない。家屋が密集して建っているため、火災による被害を防ぐため屋根には黒いビニールシートが使われている。このため、特に乾期の間は日中屋内が非常に暑くなり、じっとしてられない程である。



茅葺きの屋根の向こうに黒いビニールシートの屋根が連なっている

人口過密のため衛生状態も悪く、デング熱や腸チフスの流行など健康面への影響も深刻である。

#### (ロ) 第三国定住

上述のような劣悪な居住環境もあり、2005年末にアメリカ政府が同キャンプに登録されている難民全員を受け入れると発表した。

UNHCRによると同キャンプの難民の89%が第三国定住を希望している<sup>7</sup>。

UNHCR カンチャナブリ事務所の職員によると、第三国定住の可能性が生まれたことで、キャンプ住民が抱えてきた失望感・不満が和らぎ、人々の態度も多少穏やかになった。

#### (3) 訪問先別概要

##### (イ) キャンプ委員会

先方の説明は以下の通り。

同キャンプは最初にできた3つのキャンプ(1.(1)(八))をベースに3つのゾーンに別れ、それぞれのゾーンがさらに5つのセクションに分かれている。

キャンプは自治組織であるキャンプ委員会によって運営されており、ゾーン毎、セクション毎に委員会が組織されている。

<sup>7</sup> キャンプ委員会によると、同キャンプ住民の70%が第三国定住を希望しており、仏教徒を中心に第三国定住を希望しない者もいる。

キャンプ委員は2年毎に選出され、委員長と秘書の他、教育、保健、司法、配給、高齢者、性別・ジェンダーに基づく暴力、キャンプ内問題などについて、それぞれ担当委員がいる。

キャンプができたばかりの頃はタイの法規に関する知識があまりなかったが、徐々に学んでいる。窃盗などの軽犯罪についてはキャンプ内の司法委員会で裁くが、殺人などの深刻な犯罪についてはタイの地元当局に引き渡す。



キャンプ委員会のメンバーとの意見交換

(ロ) 同キャンプでは7つのNGOが活動しており、それぞれの活動内容は以下の通り。

Thailand Burma Border Consortium (TBBC) : 食糧、シェルター、日用品

International Rescue Committee (IRC) : 医療、水、衛生

ZOA Refugee Care Netherlands (ZOA) : 教育、職業訓練、教師養成

Catholic Office for Emergency Relief and Refugees (COERR) : 教材開発、

Extremely Vulnerable Individual (EVI)のケア、職業訓練

Right to Play (RTP) : 体育、スポーツ

Handicap International (HI) : 地雷教育、障害者支援

シャンティ国際ボランティア会 (SVA) : 図書館活動

(ハ) 学校 (小・中・高等学校)

同難民キャンプ内には学校が1つしかなく、キャンプ委員会によると全学年 (Grade1~10) 約3,200人が、縦長の校舎を仕切った教室で学んでいる。

子どもの数が多いため<sup>8</sup>、授業は午前と午後の2回に分けて実施している。

授業は全て共通語であるスゴー・カレン語で行われている。

調査団が訪問した日は雨天で、電気がないので教室内はかなり暗い。

<sup>8</sup> 同行した UNHCR の通訳によると、キャンプでは毎月約30人の新生児が生まれ、人口が増加している。



教室内

(二) 高校を修了した人のための高等教育機関 (Post-10 School)

2年前に開設され、数学、英語、教授法、保健衛生などを教えている。

教育期間は2年間で、授業は平日の7:00~12:00。午後はコンピューター6台程が設置されたコンピューター室でワード、フォトショップなどの技術を学ぶ。コンピューターはベルギー政府の寄付。

高校を卒業した生徒の10%程度が同機関で学ぶ。選考では、英語の能力が重視される (UNHCR ベンジャミン氏)。

同機関はキャンプ委員会と ZOA が共同で運営している。



コンピューター室



高等教育機関の生徒たち

(ホ) SVA 図書館

2004年にSVAによって同キャンプに開設された2つの図書館の内1つ。

子どもたちによる歌の披露と、図書館スタッフによる絵本の読み聞かせを見学。

(ヘ) 職業訓練センター

ハリウッド女優で UNHCR の親善大使であるアンジェリーナ・ジョリー氏の寄付によって、2002年に設立された<sup>9</sup>。タイのマンマー難民キャンプ初の

<sup>9</sup> 難民キャンプ内での職業訓練は 2001 年までタイ政府が正式に許可していなかった (ZOA Annual Report)。

職業訓練センターである。

同センターは2003年よりUNHCRの資金によりZOAが運営している。

同センターで提供されている職業訓練の種類と生徒数は以下の通り。

裁縫（男性：20、女性：40）

料理（24）<sup>10</sup>

エンジン整備（15）

二輪自動車整備（15）

農業・畜産（5）

ストーブ修理（2～3）

コースは全て3ヵ月間で、これまでに8期実施。3月から第9期目のコースがスタートする予定。

第一期目のコースにはタイのインストラクターを雇用し、二期目以降はコースを修了した参加者の中から優秀な人を先生として起用している。

今後の課題

- ・一期3ヵ月の基礎コース終了のみでは、所得創出活動には結びつかないが、基礎コースの受講希望者が多く、上級コースは開講できず、技術向上の機会がないこと。
- ・カリキュラムの開発ができる人材がないこと。
- ・すべてのコースで、教材の調達が困難なこと。

なお、キャンプ委員会はUNHCRやZOAに更なる技術向上及び就業機会の確保を要請している。例えば、料理コース修了者は技術向上と就労の機会を得られるよう、キャンプ内の食堂の設置をZOAに要請しているが、同キャンプが所在するラチャブリ県当局の許可が得られていない。



縫製教室にあるミシン

## 2. メーソット地域<sup>11</sup>の難民キャンプの状況

(1) メーソット地域の難民の状況

(イ) UNHCR メーソット地域事務所は、メーラ、ウンピウム、ヌポの3つの難民キャンプを管理している。

<sup>10</sup> タイのインストラクターによってタイ料理が教えられてきたが、徐々にビルマ料理のインストラクターを養成しつつある。

<sup>11</sup> メーソット地域は商業地域であり、国境経済活動が活発な地域である。

(口) 2003年以降、不法移民に対し、厳しい取締りが始まり、2004年末、新しい難民登録を停止したが、ミャンマーからタイへの難民流入は、簡単に入れることもあり、非登録者が増大した。

<メーソット周辺の非登録者数>

2002年70人、2003年300人、2004年2,000人、2005年6,500人。

このため、2006年3月末を期限として、難民登録を行っている。

(ハ) メーラ難民キャンプの難民数は、既登録者29,555人(2005年11月)に加え、非登録者16,645人を、2006年2月17日まで登録して、合計46,200人となっている。

(ニ) 一方で、2006年、メーラ難民キャンプは、約1,000人の難民の増加が予想されている。また、メーソット地区の3つのキャンプで、約2,000人の難民増加を推定している。

(2) メーソット地域の難民キャンプの第三国定住について

(イ) オーストラリア

オーストラリアについては、難民自身が個別にオーストラリア大使館に難民申請をしている。2005年は288人の難民を受け入れた。

(ロ) その他の欧州諸国等

スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、デンマーク、英国、カナダ及びニュージーランドも第三国定住として受け入れを実施しており、2005年は785人を受け入れた。欧州諸国はメーソット近郊の難民キャンプに滞在する難民を今年は2,000人程度受け入れると予想されるが、メーソット近郊の3つの難民キャンプに滞在する難民総数は約75,000人であり、従って、大多数の難民は引き続きキャンプでの滞在が続くことになる見込み。

(ハ) 第三国定住についての受け入れ基準の特徴

スウェーデンは、ローカルインテグレーションを重視し、若年層、小家族、教育程度を優先している。オーストラリアは個別申請であり、健康と、家族がオーストラリアにいること等を優先している。

### 3. メーラ難民キャンプ

キャンプの訪問日当日の日程は次の通りである。

10:00am: 「メーラ難民キャンプ委員会」

・・・当日はキャンプの自治運営メンバー20人程度が参加

11:00am: 「ZOA」による職業訓練活動及び学校教育活動

1:00pm: 「KWO (カレン女性連盟)」

1:30pm: キャンプ難民への直接インタビュー

3:00pm: 「COERR」による平和教育活動

4:00pm: 「シャンティ国際ボランティア (SVA)」による図書館運営活動

## (1) 難民キャンプの概要

### (イ) 難民キャンプの地理

メーラ難民キャンプがあるタク(Tak)県は、タイ西部の山岳地帯に位置する。2006年2月現在、タク県にはミャンマー国境沿いに3つの難民キャンプ(メーラ、ウンピナム(Umpium)、ヌポ)があり、その内、同難民キャンプは最北に位置する。

同難民キャンプは、ミャンマー国境から直線で約8キロの所にある。キャンプ周辺地域の地形は入り組んでおり、険しい岩山や谷に囲まれている。とりわけ、ミャンマー国境との間には巨大な岩山が聳え、同キャンプはさながら「天然の要塞」に守られている感がある。調査団は、最寄りの街メーソットから車で同キャンプまで1時間かけて移動した。距離は約57~60キロ。同キャンプまでの道路はアスファルトで整備されており、車で行けば問題なく行くことができる<sup>12</sup>。



メーラ難民キャンプ内の通路



キャンプ内の商店

同キャンプは柵で囲まれており、3つあるゾーンそれぞれの入口しか入ることとはできない。各入口には、タイ政府の警備員が配備されているが、難民たちはキャンプを抜け出し、近くの村までモノを売りに行くこともあるという<sup>13</sup>。キャンプの出入管理の緩やかさが伺える。

### (ロ) 難民キャンプの歴史と人口増加

メーラ難民キャンプの起源は1984年に遡る。KNU基地の陥落により、タイに避難してきた避難民約1,100人の保護を目的として、同キャンプが作られた。最初に設置された難民キャンプは現在の場所とは異なるが、タイ政府は安全上の懸念から、同年中に現在の場所(Zone C 辺り)にキャンプ地を移動させた。

<sup>12</sup> タム・ヒンキャンプへ通ずる道路と比べると、メーラ・キャンプへの道路は格段に整備されている。タム・ヒン近郊の道路は、途中、アスファルトが切れ、でこぼこの砂利道を30分程度通らなければならない。

<sup>13</sup> 避難民たちと周辺の村人たちの間では、経済的なつながりある一方で、対立が生じたこともあるという。例えば、避難民が住居の屋根として使用するユーカリの葉の供給が不足した際、避難民たちはユーカリの葉を求めてキャンプ外に取りに行った。キャンプ周辺の村人は自分たちの資源が奪われていると感じ、抗議した(Chris Cliffordへのインタビュー, 2006/2/16, TBBC Mae Sot)。

メーラ難民キャンプは人口増加を繰り返してきた。1995年4月、メーラ周辺の5つのキャンプ（Mae Ta Waw, Mae Salit, Mae Plu So, Kler Kho and Kamaw Lay Kho）が閉鎖<sup>14</sup>され、メーラ難民キャンプへ避難民を統合した。その結果、1995年内に人口は6,969人から13,195人に増加し、また翌年には26,629人に急増した。さらに1997年3月のHuai Bone キャンプの閉鎖、及び1998年2月のShoklo キャンプの閉鎖も、メーラ難民キャンプの人口増加につながった。人口増加に伴いキャンプの敷地は拡大し、複数のZone から成る仕組みとなった。現在、キャンプは3つのゾーン（A・B・C）で構成されている。

2005年12月現在、メーラ難民キャンプには46,534人<sup>15</sup>、約11,000世帯が居住している。これは、タイにおけるミャンマー難民総数142,917人の内、3分の1以上を占め、同国最大である。

同キャンプ人口の増加に伴い、難民一人当たりのキャンプの敷地面積は狭くなり過密化が進んでいる。近年において、人口増加の主な原因は2つある。第1に、新たな避難民の受け入れである。毎月100人程度の新しい避難民が到着している。多い月は数百人に上り、例えば2006年1月は622人が到着した。第二に、キャンプ内での出生である。キャンプ内では高い出生率の高さは、キャンプ人口の約50%が17歳以下となっている現状からも伺われる。

#### （八）難民キャンプに暮らす人々

##### 滞在者

メーラ難民キャンプの総人口(2005年12月現在)は、46,534人である。また年齢、ジェンダー、エスニシティ、宗教の4項目を基準に分類した統計データは、次の通り（TBBCの資料）。

分類基準	カテゴリー	割合 (%)
年齢	5歳以下	13%
	5～17歳	36%
	18～59歳	47%
	60歳以上	4%
ジェンダー	男性	51%
	女性	49%
エスニシティ	カレン族	95%
	ムスリム	3%
	その他（チン族、カヤ族、モン族、シャン族）	2%

<sup>14</sup> 小規模キャンプ群の閉鎖の原因となったのは、周辺キャンプの安全性の低さ、またキャンプが多数あることによる安全確保の困難さである。1つの例として、1995年1月、ビルマ政府軍による周辺キャンプ（メーラを除く）の攻撃事件がある。これ以後、タイ政府は難民の安全管理を容易にする目的で、メーラ・キャンプに難民を集合させた。

<sup>15</sup> UNHCR 提供値だが、TBBC に共有されている。当値は、タイ行政下の PAB による登録を受けていない者を含む。なお、UNHCR によれば 2005 年 11 月 1 日現在、29,555 人が難民登録を受け、16,645 人が登録のないまま、キャンプに居住している。

宗教	アニミズム	3%
	仏教徒	35%
	キリスト教徒	47%
	ムスリム	15%

### 多様性

上記表に見られるように、同キャンプ内のエスニシティ構成は複雑である。大きくはカレン族（95%）、ムスリム（3%）及びそれ以外（2%）に分けられるが、カレン族はさらにいくつかのグループに細分化できる。カレン族内部での最も大きい区分は、スゴー・カレン族とポー・カレン族である。前者にはキリスト教徒が多く、また後者には仏教徒が多いと言われる。両エスニック・グループの母語は異なり、基本的にはお互いに固有の言語では理解しえない（ただしキャンプに同行したタイ在住のカレン族出身の通訳の男性によれば、多くの場合、ポー・カレン族の人々はスゴー・カレン族の言葉を理解できるが、その逆の場合は少ない、とのこと）。またイスラム教徒はカレン語よりむしろビルマ語を話す人が多い。したがって、エスニック・グループ間で主にコミュニケーションに用いるのは、スゴー・カレン語、ビルマ語、英語の3つである。なお、キャンプ内には多くの宗教施設がある。キリスト教会は25、仏教寺院は4、イスラム・モスクは4である。

エスニシティ・宗教構成の多様性にも関わらず、キャンプの居住者たちは基本的に「調和して」生活していると見られる。ZOAのキャンプ駐在員 van der Stouwe 氏によれば、スゴー・カレン族とポー・カレン族の差異が、集団的対立にまで発展した例は報告されていない。ただし、目に見える対立はないにしても、集団間での格差の状況が NGO 関係者によって報告されている。例えば、スゴー・カレン族はキリスト教徒が多く、また英語を話す者が多い。それに対して、ポー・カレン族は仏教徒が多く、相対的に英語を話す者が少ない。こうした属性・教育の差が、援助の受益に関する格差を生んでいる可能性がある。例えば、英語の話し手は場合によっては第三国定住の審査時に優遇される場合がある（英国は英語を審査基準としている）。また Van der Stouwe 氏の指摘によれば、ムスリムに関しては、カレン族の間では「カレン外の人々」とみなされている傾向があり、批判の対象となることもあるという。

なお、キャンプ内では各エスニック・グループ間で緩やかな住み分けが見られる。C1 地区はバプティスト教徒が多く居住し、C2・C4・B3 地区ではイスラム教徒が多く、また B1・B2・B3 地区では仏教徒がほとんどである。ムスリムはキャンプ内で商業を営んでいる者が多いという。

### 登録者と非登録者

キャンプ内では、タイ国内法上、「避難民(Displaced Person)」として登録された者と、そうでない者が共存してきた。厳密な意味での「避難民」とは、



タイの地方行政府下にある PAB<sup>16</sup>による登録基準を満たす者である。そこには、「村が実際に攻撃を受けるなど、戦争による直接的暴力から逃れてきた」という基準が含まれる一方で、「近くの村が攻撃されたが、自分の村は実際には攻撃を受けず、戦争に巻き込まれる脅威を恐れて避難してきた者」は登録から除外されてきた。UNHCR によれば、2005 年 11 月 1 日現在、29,555 人が登録者であり、16,645 人が非登録者である<sup>17</sup>。ただし非登録者もキャンプに居住できること、また福祉・援助サービスを受けられる等、実質的な難民としての条件では登録者と概ね変わりはない。しかしながら裨益に関する違いは、避難民が第三国定住を希望する場合に生じる。登録者(the registered / recognized populations)には第三国定住の道が与えられるが、避難民の登録を受けられなかった非登録者(the unregistered / PAB populations)にはそのような解決の道はない。

ところで、なぜそのような非登録者がキャンプ内に存在するのか。背景には次の 2 点がある。第一に、ミャンマーからの出国及びタイへの入国の容易さ、また難民キャンプへの受け入れの柔軟さである。これまで確かに、タイ政府は「近くの村が攻撃されたが、自分の村は実際には攻撃を受けず、戦争に巻き込まれる脅威から避難してきた者」については「避難民」の登録を与えてこなかった。それにも関わらず、政府はそうした避難民に対して、入国やキャンプへの居住を拒否することはなかった。第二に、様々な理由からキャンプで暮らそうと希望する人々がいることである。その目的は大きく 経済目的、教育目的の 2 つに分けられる。ミャンマー国内の人々にとって、難民キャンプはタイ国内での就労を希望する人々にとっての通過点となりうる。法的には、避難民はキャンプ外に許可なく出ることもなくタイ国内での就労も不可であるが、実際には不法労働を試みる者もいる。またメーラ難民キャンプは教育の場・留学先としての評価が、ミャンマー国内で高まっている。これはミャンマー国内（主に東部）の教育事情が、メーラ難民キャンプよりも相対的に劣ると見なされているためであろう。

最近の動向として注目すべきは、この「登録者 / 非登録者」というカテゴリーは、近々もはや有効ではなくなろうとしている事実である。これまで「非登録者」であったタイ国内のミャンマー人<sup>18</sup>のほとんどが、「避難民」として登録されようとしている。そのきっかけを生んだのは 2005 年以降のタイ政府の難民問題への姿勢の柔軟化である。

## (二) 難民キャンプ内の公共施設

キャンプ内には次のような公共施設がある。

- ・学校：総数 23 校（小学校 14 校、中学校 4 校、高等学校 5 校）。生徒総数

<sup>16</sup> PAB は、タイ地方行政府の下、2000 年に設立した。設立までは、UNHCR の協力があった。2002 年、難民認定基準に対する見解を巡る論争（例えば、戦争の直接的暴力の被害者でない避難民を難民として認定するか否かという論点）をきっかけに、PAB は一時機能停止に追い込まれた。しかし 2005 年 11 月に PAB は再生し、以前よりも柔軟な難民認定基準を設けている。これはタイ政府の難民に対する姿勢の柔軟化の兆候と見られる。

<sup>17</sup> この時点（2005 年 11 月 1 日現在）でのメーラ・キャンプ人口は 46,200 人。

<sup>18</sup> タイ国内のミャンマー人（違法居住者も含む）は、約 4,000 人と推定されている。

12,344 人、教師総数 462 人。

- ・その他の教育施設：看護学校 20 校、教師訓練コース、機械工ワークショップ、工学学校、「Eden Valley アカデミー（10 年間学校の卒業者のための高等教育機関）」、リーダー経営学校、聖書学校、高等教育機関、障害者のための学校。
- ・教会：キリスト教教会 25、仏教寺院 4、イスラム・モスク 4。

これらの中で、調査団が訪れた教育施設の状況について簡単に報告したい。キャンプの子供たちや青年たちの活気ある学校の雰囲気は、「学ぶ意欲が溢れている」と感じるのに十分なものだった。また、言語、工学、芸術など、彼らが学ぶ分野の広さも印象的であった。特に芸術分野の活動は目に留まった。学校で出会った青少年少女たちは、様々な芸術活動を行っていた。音楽（ギターの弾き語り、電子キーボードの演奏）、絵画（風景及び人物画の模写）、カレンの伝統的な織物、などである。音楽でも絵画でも、中にはその年齢として驚くほど上手な生徒がおり、基礎指導の充実を伺わせるものがあった。ギター教室で出会ったある青年は、黒板に複雑なコードを書き、楽譜に従って別の青年がギターを弾く姿が見られた。また SVA の図書館を訪れた際も、4～7 才程度の子どもたちが 10 人程度で、伝統楽器（弦楽器・豎琴）の合奏及び歌唱を、我々に披露してくれた。子供たちの生き生きとした表情・表現は、幼児教育における教師訓練の充実を感じさせた。



電子キーボードの練習



ギター演奏



カレンの伝統的編み物



絵画

#### (ホ) 難民キャンプの安全

メーラ難民キャンプとビルマ国境の間には、切り立った岩山が聳え立っている。それにも関わらず、キャンプは国境と僅か 10 キロ程度しか離れておらず、絶対安全とは言えない。実際、1987 年には DKBA とビルマ政府軍による攻撃を受けたことがある。また 1998 年 3 月には迫撃砲がキャンプに飛来した。こうした事件は飽くまでも例外的であるが、潜在的な恐怖は常にある。武力攻撃の恐れに加えて、また乾季になるとキャンプが焼かれる脅威がある。

2006 年 2 月現在、キャンプ内及びキャンプ周辺地域の治安維持体制は次の通りである。

タイ政府軍 (Army Rangers)

兵員は 50 人程度。キャンプ南に位置する高速道路上のチェックポイントでの管理。司令官は Preecha Chomchart 氏 (2006 年 2 月現在)。

タイ政府内務省 (Ministry of Interior: MOI)

地方行政官の中から「キャンプ指揮官 (Camp Commander)」を任命し、また県・地方行政の指令の下に「地域防衛ボランティア協力員 (Territorial Defense Volunteer Corps Personnel)」を配置し、キャンプ内の治安維持にあたらせている。2006 年 2 月現在、キャンプ指揮官を務める Akarapun Poonsiri 氏の下、総勢 130 人が任務にあっている。

国家安全保障理事会 (National Security Council)

ビルマへの帰還を希望する難民を支援する。4 人が勤務。

森林保護局 (Forest Rangers)

キャンプ周辺の自然資源・森林資源を保護する。

#### (2) 難民キャンプの支援活動

メーラ難民キャンプの支援体制を構成するのは、キャンプ内の自助活動、外部支援団体、の 2 つである。以下それぞれ説明する。

#### (イ) 難民キャンプ委員会とコミュニティー組織 (CBOs)

キャンプにおける分配活動・福祉活動の運営は、難民自身によって組織された「キャンプ委員会 (Camp Committee / Refugee Committee)<sup>19</sup>」が中心となって行う。キャンプ中央委員会は、委員 15 人によって構成され、2 年毎に選挙で選ばれる。2005 年 10 月の選挙によって、Saw Saw Po Karen James Bond 氏がキャンプ・リーダーに選ばれている。キャンプ委員会では、配給・保健・教育・内務など分野毎にリーダーが決められている。キャンプ委員会には下位組織が存在する。まずキャンプは 3 つのゾーン (A, B, C) に分けられるが、それぞれに「ゾーン委員会 (Zone Committee)」が設けられ、9 人ずつの委員がキャンプ運営に携わっている。さらにその下位に「セクション委員会 (Section Committee)」がある。セクション委員会は各ゾーンに 5 つずつ設けられている。

<sup>19</sup> 「キャンプ委員会」の名称に関して、TBBC は (Central) Camp Committee と表記している一方、UNHCR は Refugee Committee としている。



キャンプ委員会との意見交換

また、キャンプ委員会を中心とした「公的な」システムの他に、難民たち自身によって組織された「コミュニティー組織（Community-Based Organisations: CBOs）」<sup>20</sup>の存在がある。こうしたCBOsは、キャンプの外部からくる支援団体（UNHCRやNGOなど）の受け皿として機能するだけでなく、裨益者自身によって内発的にキャンプを運営する姿勢の現れと言える。2006年2月17日現在、メーラ難民キャンプ内で活動しているCBOは、以下の8団体である。

カレン女性組織（Karen Women's Organisation: KWO）

カレン青年組織（Karen Youth Organisation: KYO）

ビルマ・ムスリム女性組織（Muslim Women's Organisation of Burma: MWOB）

仏教学校運営委員会（Buddhist Schools Management Committee: BSMC）

カレン障害福祉連盟（Karen Handicapped Welfare Association: KHWA）

カレン学生ネットワーク・グループ（Karen Student's Network Group: KSNG）

ポー・カレン識字文化委員会（Pwo Karen Literacy and Culture Committee）

社会関係作業グループ（Social Relations Working Group: SRWG）

<sup>20</sup> 「コミュニティー組織（Community-Based Organisations: CBOs）」は、一般的に「受益者による自助運動組織」と定義される。当概念に対置される「NGO/NPO」は、外部者による側面的支援団体であり、援助の受益者自身は構成メンバーには含まれない。

<小事例： カレン女性組織：Karen Women s Organisation KWO>

…以下の情報は、2006年2月17日にKWO本部を訪問時に受けたブリーフィング及び聞き取り調査に基づく。

1. KWOの創立： 1996年
2. KWOの組織規模： 十数人の主要メンバーによって運営される。
3. KWOの3つの機能：
  - (1)社会活動：収入向上、人権、ジェンダー暴力、レイプ問題、女性への避難所の提供
  - (2)教育：女性への識字教育、健康問題、女性の権利の啓発
  - (3)組織化：キャンプ内に22の看護学校の運営
4. キャンプにおける女性問題
 

ジェンダー暴力・家庭内暴力への対応が最も多い。レイプ問題は比較的稀である。
5. 収入向上活動の一例（KWOメンバーへの聞き取り調査より）
 

KWOメンバーの女性は、TBBCより糸を援助として提供され、KWOの職業訓練施設で織ってサローンを作る。1人が作ることができるサローンは、一日に10枚程度である。できたサローンは、一度、TBBCに納入される。サローンは一枚27パーツで売られ、その内12パーツはKWOファンドに納められることになり、残る15パーツ分は女性たちへ労働賃金として支払われる。なお、KWOファンドは、組織の運営維持費用、あるいは生業活動に必要な固定資産に使用される。

(ロ) 外部支援団体

キャンプ外より来訪した援助関係団体は、難民たちの生活に関して多大な役割を果たしている。難民が生活を行うのに不可欠なもの（水・食料、保健衛生、教育など）が幅広く提供・側面支援されている。国際機関では唯一 UNHCR が活動し、その他は NGO である。2006年2月現在、メーラ難民キャンプで活動中の NGO は次の12団体である。12団体のうち3団体（TBBC, COERR, PRAT）がタイ国内を本拠地とする NGO であり、残る9団体は欧米を中心とした国際 NGO である。日本からは唯一、SVA（シャンティ国際ボランティア）が図書館活動を支援している。

団体名称	活動分野	備考
TBBC -Thailand Burma Border Consortium	食料供給 シェルター 日用品	TBBCはChristian AidやChristian World Serviceなど、キリスト教関係のNGOを中心としたNGOの連合体である。
AMI -Aide Medicale Internationale	保健 水供給 公衆衛生	キャンプ内に2つの研究施設と1つの結核患者用の病棟がある。
HI -Handicap International	社会福祉 地雷教育	コミュニティー復興プログラム、地雷危険教育プログラム等
ZOA	教育 職業訓練	教科書供給、カリキュラム開発、教育者の教育

TOPS -Taipei Overseas Peace Service	看護教育	看護学校への栄養プログラム提供、看護教師の補助
ICS-Asia -International Christelijk Steunfonds Asia	教育	教科書や鉛筆などの提供
DEP -Distance Education Program	教育	遠隔地教育プログラム（経営学他）
COERR -Catholic Office for Emergency Relief and Refugees	平和教育 カウンセリング 社会的弱者支援	EVI プログラム（Extremely Vulnerable Individuals）、環境マネジメントプログラム
WE/C -World Education Consortium	教育	学校教師の訓練、教材の開発・提供
SMRU -Shoklo Malaria Research Unit	医療	マラリアの研究及び治療 キャンプ内に4つのクリニック開設
PRAT -Planned Parenthood Association of Thailand	家族計画	
SVA -Shanti Volunteer Association	図書館活動	本を提供するだけでなく、コミュニティ・スペースの提供 キャンプ内の図書館数：6

以下、訪問日に訪れた NGO の内、2 団体の活動及び現状について、それぞれ事例として紹介する。なお、これら 2 団体の事例に加え、唯一の日本の団体である SVA の活動については、 . にて別途述べることにする。

#### (八) 事例 1：ZOA の職業訓練活動

オランダの NGO、ZOA Refugee Care (ZOA) は、メーラ難民キャンプのみならず、7つのキャンプにまたがって職業訓練 (Vocational Training) を行っている。1つのキャンプから、別のキャンプへ、キャンプを超えて訓練を受講する仕組みである。2005 年において全 7 キャンプを受講生の総数は、2,408 人にのぼる。その内、メーラ難民キャンプからの受講生は、826 人であった。



ZOA による調理、製パン訓練コース



調理コース

2005 年度に実施された職業訓練の内容は、コンピュータースキル、裁縫、料理、機械工、音楽、TinSmith、農業、Blacksmith、ストーブ製作、ラジオ製作、編み物、毛織、バスケット製作、カーペントリー、ヤギ養育、の 15 項目である。

調査団がメーラ難民キャンプ内の ZOA の施設を訪れた日の朝、ちょうど基礎教育を終えた青年たちのための職業訓練として、機械工（この日は車の修理）の授業が行われていた。これは訓練コースの中に含まれる集中ワークショップ（10 日間の日程）の中の一講座であった。講義には十数人の青年受講者が参加し、彼らは様々なキャンプ（近くはウンピナムやヌボ、遠くはタム・ヒンまで）から来訪していた。そのうち、メーラ難民キャンプからの受講生は 5 人であった。



機械工の授業

調査団を案内してくれた ZOA のプログラムアドバイザー、Hans Odijk 氏によれば、この訓練は 3 ヶ月コースで、主に機械工に関する理論的な習得に重きがおかれる。難民たちにとって、「理論」の習得は職業訓練の一環として不可欠なものである一方で、「実践的訓練」は経験する機会が極めて少ないという。例えば、車の修理の訓練の場合、基本的に狭いキャンプの中での生活しか許されない難民たちにとって、実際に車に乗る機会・触れる機会は皆無である。例外的に、2005 年中には壊れた車を一台修理する機会があったという程度である。



訓練用教材の車両

職業訓練を受ける難民たちにとっての問題は、受けた訓練がどの程度実際に役立てられるのか、という点であろう。悲観的に見れば、現在のキャンプ内のニーズに合った訓練なのか、また訓練を将来的に役立てる社会環境がいつくるのか、という点は明瞭ではない。一方で、難民たちの職業訓練に熱心に取り組む姿勢は、キャンプ生活という現状の打開への期待の現れ、という側面がある。さらに、このような高等教育は、学習・教育に対して貪欲なカレン族の人々にとって、「教養・能力の向上」という価値を得る機会に違いない。

## (二) 事例 2 : Catholic Office for Emergency Relief for Refugees (COERR) の平和教育活動

COERR は、タイを拠点とするカトリック系 NGO である。2003 年に創立し、「極めて脆弱な個人 (Extremely Vulnerable Individuals ; EVI)」をターゲットとして支援活動を実施してきた。主要な EVI とは、具体的には戦争未亡人・孤児・老人である。

COERR が扱う問題及び活動は、次の通りである。

- ・個人の心理的な問題 …… 心理カウンセリングの実施
- ・身体障害の問題 …… 障害者への様々なサポート
- ・自然環境・農業環境の保全 …… キャンプ内を清潔に保つ
- ・記憶からの治癒と和解 …… 平和教育の実施

COERR が焦点をあてるのは、難民の心理的・精神的ニーズである。多くの難民が戦争の記憶とともに生きている。親類や友人を失ったり傷つけられた記憶、また彼ら自身が直接的暴力を受けた記憶などである。そうした「精神的な惨めさ」を持った難民たちに対して、COERR はキャンプの指導者たち(宗教指導者を含む)とともに、心のサポート・サービスの提供を行っている。カウンセリングは、それが必要な難民たちに対して、少なくとも 1 年に 2 度、定期的に行われる。COERR は、カウンセラーを新たに訓練している。1 年に 2 度、研修の機会を設け、これまで 24 人のカウンセラーが育った。しかし、キャンプ内での需要があまりにも多いため、とても供給が追いつかないという。

COERR はカトリック教の宗教団体を母体とし、その理想の表現においては宗教的な色彩が見られる。例えば、目指されるべき「4 つのレベルでの和解」について、次のように表現された。すなわち、自分自身との和解、他者(例えば、家族・コミュニティー・ビルマの人々)との和解、自然環境との和解、そして自身の信仰との和解、である。しかしながら、カウンセリングの方法あるいは平和教育の方法において、宗教的な色彩は薄い。心の平和を与えるために、COERR が採用する手段は、歌唱、ダンス、ゲーム、紛争についての知識の伝達、といったものである。

なお、COERR が行っている平和教育活動は、あくまで「個人の」精神的問題の解決への取り組みであり、ビルマ人や他民族の動員を伴う共同参加型の平和教育という性格を強調するものではない。

## (3) 今後の課題・ニーズ等

ミャンマー国内の状況は依然として安全とは程遠く、本国帰還という最も望まし



い解決は見通しが立たない。そんな中、避難民たちにとっての当面、将来の選択肢として実現可能性が高いのは 第三国定住、 キャンプでの継続的滞在、の2つである。以下、それぞれの展望について述べる。まず同キャンプの避難民の第三国定住の可能性がどの程度広いのか、またどのような問題があるのか述べる。その上で、キャンプでの生活を続ける（であろう）避難民たちの現在の優先的ニーズ、及び支援活動の課題について触れたい。

#### (イ) 第三国定住の可能性

昨年まで、メーラ難民キャンプから第三国定住を果たした者はほとんどいなかった。しかし2005年7月以降、初めて第三国定住の計画が具体化した。2006年2月の段階で、オーストラリア、ニュージーランド、英国の3カ国がタク県の3つのキャンプ（メーラも含む）からの難民の受け入れに合意し、2006年中に約1,500人が出国予定である。また当3カ国に加え、近々ノルウェーとスウェーデンも受け入れに合意する可能性があるという<sup>21</sup>。この受け入れ人数はタム・ヒン難民キャンプにおける計画ほど大規模ではないが、解決の1つの道が加わった意味では、明るいニュースと言える。

ただし問題もある。第三国定住が実施されるにあたって、「誰が（第三国定住者として）選ばれるのか」が問題になる。難民の選別の基準<sup>22</sup>は各国によって様々であるが、「英語が話せるか否か」が重要な要因となることがあると言う。このような意味で、「英語が話せる者」と「話せない者」の間で格差が生じる可能性がある。また、この分類法が重要であるのは、「英語の話せる者」と「話せない者」という対立軸が、緩やかではあるが、カレンの2大エスニック・グループ（スゴー・カレン族とポー・カレン族）に重なるからである。しかし残念ながら、誰が（どのグループが）どの程度の英語を話すのか示した統計的なデータが、これまでの所ない。UNHCRとTBBCは、これまでの所一般的な社会学的な分類法（民族・年齢・ジェンダーなど）を採用しているが、こうした分類基準に加え、「英語力」を通じてキャンプの現状を見ることが必要と思われる。

いずれにせよ、第三国定住によって「解決」しそうな人々の数は、メーラ難民キャンプの人口の大きさを考えれば僅かではない。残る避難民たちは、引き続き狭いキャンプ内での生活を余儀なくされるだろう。そこで次に、キャンプに残らざるを得ない人々の立場にとって、キャンプ内の当面のニーズや課題を述べる。

#### (ロ) キャンプにおけるニーズと課題

キャンプでは、いわゆる基本的ニーズ（BHN）の提供は一義的に重要である。ではどのような分野が不足し、優先的に必要とされているのか。

これまでメーラ難民キャンプに固有の問題の中で焦点となってきたのは、水の供給である。UNHCRは、メーラ難民キャンプの水不足の問題の重要性を述べている。メーラ周辺では乾季になると慢性的に水不足が懸念事項となってきた。水問

<sup>21</sup> Elizabeth Kirtonへのインタビュー，2006/2/16，UNHCR，Mae Sot。

<sup>22</sup> 一般的に、難民審査の基準は、難民たちの主張、客観的事実（英語力・宗教など）の2要素によって構成される。例えば、米国は については形式上基準とはみなしておらず、主張によっては「誰でも（例えば、英語力や宗教に関わらず）」難民として適用されうる。

題の深刻さは90年代から喚起され、現在までに60の井戸が建設された。しかしUNHCRは人口増加が進む中での問題の継続を指摘している。

一方で、裨益者たちはどう見ているのか、以下、調査を通じて聞かれた現場の声のいくつかを紹介したい<sup>23</sup>。

まず、メーラ難民キャンプ委員会の現リーダーSaw Saw Po Karen James Bond氏は、「キャンプでの現在の最重要ニーズは何か」との質問に対し、「食料や水の問題は近年減ってきているものの、教育支援が不十分であり、特に高等教育・職業訓練で更なる支援を必要としている」と答えた（Bond氏によるキャンプのブリーフィング，2006/2/17，Camp Committee，Mae La）。

また学校（高等教育）で遭遇した難民の青年たちの中には、「本はあるが、パソコンが足りない」と話し、「キャンプでは電話線がなくインターネットが使用できない」と話す者もいた。また別の青年に「タイの学生たちと交流はあるのか」と訊ねると、「ほとんどない。キャンプに来るのは、ほとんどがタイ人以外の外国人だ」と答えた。隣人であるタイの人々との距離の遠さと、交流の幅の薄さが垣間見える瞬間であった。

この他、難民たちと触れ合う中で、あちこちで聞かれたのは、「夢がない」「未来がない」という声である。自分たちで生業を営むことが十分にできない実態<sup>24</sup>、あるいは知識や技能を生かすことができない実態は、タイにおける難民キャンプの社会的立場の弱さを物語っている（例えば、難民たちは職業訓練を受けることはできても、仕事を得ることはできない）。本国帰還が困難であるのに加え、庇護国定住の選択肢についてあきらめ感が働いている中、「解決が見えない」という苦しみの人々の中にある。

## ・ シャンティ国際ボランティア会の図書館活動

### 1. 活動を開始した背景

シャンティ国際ボランティア会(SVA)は2000年9月から、タイ政府の承認ならびにUNHCRとの事業実施団体の契約に基づき、タイ・ミャンマー国境地帯の難民キャンプにおいて、図書館活動を行っている。これは、米国と日本のNGOが協力しながら難民支援を行うという日米コモンアジェンダの枠組みの元で、World EducationとWorld Learningの連合体であるConsortium Thailandという米国のNGOとの間で覚書を結び、協力関係を持ちながら、実施されている。資金は、主にUNHCRの難民支援計画実施契約に基づいて調達している。

SVAは、2000年9月にメーホンソン県メーサリアン郡メコンカ・キャンプ及びソブモイ郡メラマルアン難民キャンプを対象に活動を開始、事務所の設置、現地職員の雇用、供与する本の調達・翻訳・制作、図書館の運営組織である図書館委員会の設立、図

<sup>23</sup> 「キャンプのニーズは何であるのか」を知るのは難しい。裨益者・支援者など、立場によって必要と感ずることが変化する。例えば、キャンプのリーダーの発言が必ずしもキャンプの避難民全体を代表するとは限らず、避難民たちの間ではリーダーの発言とは異なる細々としたニーズがありうる。また、支援者たちの間でも見解は一樣ではない。

<sup>24</sup> タイ政府の公式見解として、キャンプ外ではもちろんキャンプ内でも、避難民たちによる全ての店舗経営は不法だが、実際は黙認されている。キャンプ内には、約500軒のお店がある（Chris Cliffordへのインタビュー，2006/2/16，TBBC Mae Sot）。

書館の建設、図書館員の養成といった図書館開館のための準備期間 6 ヶ月を経て、2001 年 3 月、メコンカ・キャンプにおいて 3 館を開館、2001 年 6 月、メラマルアン難民キャンプにおいて 3 館を開館した。

SVA は 2 つの方針で活動を行うことにしている。

1 つ、SVA のこれまでのカンボジアやラオス難民キャンプでの経験を活かし、図書館活動を行うこと。学校に母語であるカレン語の絵本や読み物は皆無に等しく、ましてやキャンプ図書館はないキャンプがほとんどである。

2 つ、最も支援の少ないキャンプから活動を始めること。

以上の理由から、メコンカ難民キャンプとメラマルアン難民キャンプを活動の最初の場所として選定した。メーサリアンからメコンカ難民キャンプまで 1 時間半、メラマルアン難民キャンプまで 3 時間(雨季は 6 時間)かかるというアクセスの悪さから、メーサリアンに事務所において教育分野の支援を行っている NGO は ZOA しかなく、他のキャンプと比べて援助の量が少なかったからである。

図書館員の養成研修の後、2000 年 3 月にメコンカ難民キャンプでキャンプ図書館を 3 ヶ所オープンした。6 月にメラマルアン難民キャンプにおいても 3 つのキャンプ図書館を開館した。本事業の戦略は 3 つ。



読み聞かせを熱心に聞く子供たち(タム・ヒン難民キャンプの図書館)

1 つ、運営母体は、SVA ではなく教員やセクションリーダー、女性グループの代表で構成される図書館委員会であるという点。これは援助に対する依存をできるだけ減らすとともに難民の自主性を高めるためである。図書館委員会は、図書館の建設、維持管理のほか、図書館の規則を SVA と協議により決定し、図書館員の選定、購入する成人向け雑誌の選定を行った。

2 つ、図書館サービスは難民自身が行うこと。図書館専門家の役割は、図書館活動を難民自身が行えるようにするための能力を高めることであって、子供に直接読み聞かせを行うことではない。これは事業の持続可能性を保障するために不可欠である。月に 2 回モニタリングを行い、読み聞かせの能力を高めるための助言指導を行うとともに、図書館員の現職研修(工作、折り紙、謄写版の活用、カレンのすばなしや手遊び、大人向けの本の貸しだし、活動計画づくり)を実施した。その結果、図書館員が自ら活動を行えるようになった。



紙芝居（タム・ヒン難民キャンプの図書館）

3つ、母語であるカレン語だけでなく、将来の帰還（いつになるか全くめどはたっていないが）に備えて、母国の共通語であるビルマ語での本の支援も行うことである。図書館専門家は、60タイトルの優れた普遍的な価値をもつ児童書を選定し、キャンプの教員やSVAのスタッフがカレン語とビルマ語に翻訳し、図書館員が訳の貼りつけ作業を行った。本の選定にあたっては、平和や環境、人権の大切さを育む本、他国の文化の理解に役立つ本、栄養や保健、衛生の理解に役立つ本も選定の基準とした。一方でカレンの人々の口承文化の伝統を継承するため、カレンのおはなしも重視する。圧倒的にカレン語の本が不足しているため、本の出版事業も同時に行っている。これまでに、HIV/AIDSについての子供の本、アジアの民話集、折り紙のマニュアルの3タイトルを出版し、図書館、学校に配布した。今後は、子供の権利についての絵本、カレンの民話集、母親たちの生活史の聞き書きなどの本を出版する予定である。また、かつてカレン語で出版され絶版となっている本の復刻も行う。

難民援助というと、食糧・水・保健・衛生・シェルターの支援が一般的である。しかしSVAは、1980年のタイにおけるカンボジア難民キャンプ以来、難民の持つ文化を大切にしたい教育活動をキャンプ内で行うことが、難民の自立につながるという考えに基づいて図書館活動を実施してきた。また、難民キャンプ設立以来、保健・食糧・居住といった生存するための協力や学校の支援は、オランダ、アメリカはじめ各国のNGOが行っている。しかし、文化・余暇の機会が不足していること、キャンプの少なからずの子供・青年が、心理的な傷（トラウマ）を負っているということから、SVAは図書館の活動を支援することにした。SVAは、これまでのカンボジアやラオスの難民キャンプでの活動の経験から、子供の発達のためには、食べ物や住居だけでなく、本や図書館も必要であると考えている。本は、子供たちが協力する態度や価値を高めるだけでなく、子供の心理的な傷を癒す力もあるからである。

## 2. 現状

現在SVAは、7つの難民キャンプにおいて、22館の図書館を開設・運営をしており、絵本をカレン語・ビルマ語に翻訳して、閲覧、貸出を行っている。

活動している難民キャンプは以下のとおり。

メーホンソン県ソブモイ郡メラウ難民キャンプ

メーホンソン県ソブモイ郡メラマルアン難民キャンプ  
 タク県ウンパン郡ヌボ難民キャンプ  
 ポップラ郡ウンピラム難民キャンプ  
 ターソンヤン郡メーラ難民キャンプ  
 カンチャナブリ県サンクラブリ郡バンドンヤン難民キャンプ  
 ラチャブリ県スワンブン郡タム・ヒン難民キャンプ

2005 年までに建設した図書館数							
	メーホンソン県		タク県			カンチャナブリ県	ラチャブリ県
難民キャンプ名	メラウ	メラマルアン	ヌボ	ウンピラム	メーラ	バンドンヤン	タム・ヒン
図書館数	3	4	2	4	6	1	2
							合計 22 館

2004 年度からは、日本国内の支援者にお願ひし、日本で出版されている絵本に翻訳文を貼りつけ、毎年 1,500 冊をキャンプに送り図書館で使用する支援を、3 年計画で行っている。

また、図書館が伝統文化の継承の拠点、特に青少年の民族アイデンティティーを継承できる拠点となるような活動に拡げている。具体的には、児童向けの図書館活動に加えて、伝統楽器の学習、絵画等の情操教育、青少年及び大人を対象とした図書館活動、高齢者のための活動、民話の聞き取り・民話の冊子作成等、言葉・文化の継承の活動、世代間の交流活動にも力を入れており、図書館が図書館活動とともに、コミュニティセンターとしての役割を果たせるようにしている。

また、ミャンマー難民キャンプにて支援活動を行っている NGO はその周辺のカレン系タイ村にて支援を行っている。これは経済的に貧しいこの地域で、難民キャンプでの支援活動がタイの住民に不満や刺激を与えないようにとのタイ政府からの要請でもある。

SVA の活動の第 1 フェーズ(2001 年 2003 年)での 3 年間は絵本の供与、小学校教員研修そして人形劇公演をタイ事務所と共に不定期で行ってきたが、第 2 フェーズ(2004 年 2006 年)からは定期的な支援活動として、移動図書館活動を実施した。これは、初年度の 2004 年については、メーソット事務所に最も近いターソンヤン郡のみにて実施。10 ヲ所の小学校を対象に図書箱を巡回させていった。2005 年度は、難民キャンプ周辺の 6 郡 60 の小学校に 50 冊のタイ語の絵本の入った図書箱を巡回した。巡回前は「読み聞かせ」についての教員研修も行った。

### 3 . タム・ヒン及びメーラ難民キャンプにおける図書館活動

タム・ヒン難民キャンプにおいては、2004 年度から図書館活動を開始した。同キャンプは 7 ヲ所目の活動キャンプとなるが、新キャンプ地としてはこれが最終地になる予定である。5 月には図書館 2 館が開館した。

メーラ難民キャンプにおいては、2002 年度から活動を開始し現在図書館 6 館が運営されている。

タム・ヒンとメーラ難民キャンプにおいては、図書館員による絵本の読み聞かせを柱に、子供たちに対し、「お絵かき」「ゲーム」「工作」「歌」「伝統楽器の学習」などを

日替わりで実施している。また、地域コミュニティの住民にも参加できるような、子供たちによる「おはなし大会」(子供たちによる創作おはなし大会)、「お絵かきコンテスト」なども開催している。大人向けの図書サービスとしては、毎月 50 冊～70 冊を、新しい図書として配布している。また、高齢者のための活動、民話の聞き取り・民話の冊子作成等も行っている。

#### 4. 今後の課題等

2006 年度は、メラマルアン、メラウそしてバンドンヤン難民キャンプにて図書館の増築を行い、新たに 3 館の図書館が開館する予定である。各図書館はこれまでのデザインと異なり、青少年の部屋が加わる予定である。

SVA は、難民キャンプにおいても公共図書館のモットーである全ての人々に対するサービスを考え、その向上を目指しているが、まだ様々な年齢層全てに行き届いたサービスを提供できていない。特に、成人男子、障害者等に対するサービスの向上がこれからの課題である。

また、タイ国内におけるミャンマー難民の存在を、日本国内において認知・関心を高めるような広報活動を行い、新たな支援や関心の高まりを促進していくことも重要である。

### ・ミャンマー難民へのインタビュー結果

調査団は難民キャンプ滞在者で第三国定住の申請をした者、出国予定の者を中心にインタビューを実施した。

#### 1. タム・ヒン難民キャンプにて

タム・ヒン難民キャンプは、1997 年に開設された。敷地が非常に狭く、条件が劣悪であるが、タイ政府はこれ以上難民が流入しない様に意図的に狭い場所しか提供していないと言われている。アメリカは 2005 年末に、同キャンプに滞在する約 9,000 人について、希望すれば全員を受け入れると発表している。

(1) 男性、85 歳、バプテスト・クリスチャン、独身

- ・ 生まれたのはミャンマー南西部のイラワジ管区。
- ・ 父は教育の専門家であった。
- ・ インドの大学で 3 年間農業の勉強をした。
- ・ 1990 年にタボイ (Thebyu) にて教師をしていた。
- ・ 1997 年にミャンマー軍が村へ来たため、村人とともに越境した。
- ・ タム・ヒン難民キャンプでは教師をしている。
- ・ アメリカ行きを希望、アメリカに妹の孫が住んでいる。
- ・ アメリカへ行ったら、土いじり等をして生活したい。
- ・ アメリカがタム・ヒン難民キャンプの滞在者全員を希望すれば受け入れることは聞いているが、滞在者の 70% のキリスト教徒はアメリカ行きを希望すると思われるが、30% の仏教徒はアメリカ行きを望まないと思う。
- ・ キャンプ滞在の青少年に将来がないことがもっとも問題と考えている。

- ・ 日本に知り合いがいる。“Japanese Recipe (注)”ではすしを食べることを期待している。(注; 2月13日、UNHCR主催のワークショップの1つとして、タム・ヒン難民キャンプにおいて日本人調理師と難民がそれぞれの料理を紹介し、試食した。)
- ・ 日本及び日本人についての感想を聞いたところ、特に回答はなかった。

(2) 男性、57歳、バプテスト・クリスチャン、独身

- ・ 母がスゴー・カレン族で父はポー・カレン族であった。父もポー・カレン族(祖父)とスゴー・カレン族(祖母)の両親の間に生まれており、自分にとっては、ポー・カレン族とスゴー・カレン族の婚姻は普通のことである。自分自身はスゴー・カレン語を話す。
- ・ イラワジ管区のパンテノン地区で生まれ、ラングーンで育った。ラングーン大学では物理学(Physics)を学んだ。その後KNUに参加し、当初はKNUの軍事部門に所属していたが、その後市民部門に移り、教師をしていた。KNUには20年間所属していた。1997年にグループで越境した。
- ・ 難民キャンプにおける生活については、満足せざるを得ない。キャンプにおける問題は、10年教育の終了後、更なる教育の機会がなく、青少年の将来の展望がないことであると思う。
- ・ キャンプではZOAが支援している学校で科学の教師をしている。
- ・ 2005年2月にオーストラリアに難民申請をした。メディカルチェックを2回受けた。結果はまだない。
- ・ オーストラリアのシドニーに当難民キャンプで出会った友人はいるが、親戚等はいない。
- ・ オーストラリアへ行ったら働きたい。
- ・ オーストラリアへは100~200人が出国していると思う。

## 2. メーラ難民キャンプにて

(1) 男性、20歳、4人家族

- ・ キャンプで生まれた。
- ・ 両親、11歳の弟と自分で4人家族である。
- ・ KWOの事務所でCPUの手伝いをしているが、キャンプ内ではすることがない。
- ・ オーストラリアへ行き、大学へ入学し勉強をしたい。

(2) 男性、22歳、6人家族

- ・ 両親、兄、弟、妹の6人家族である。
- ・ 出身地はオンドウであり、SPDCが村へ来て、強制労働、強制ポーターをさせられた。またDKBAが自分たちが生活していた村を占領し、生活が困難となり、多くの村民が避難した。1ヵ月山の中をさまよひ、4年前の2001年に家族と一緒にキャンプへ来た。
- ・ キャンプにおいて10年の教育を終了している。現在KWOの事務所でコンピューターの仕事を手伝っている。
- ・ 将来は大学へ進学し、経済またはARTの勉強をしたい。そのために何をして

良いかわからない。

- ・ 引き続きキャンプに滞在することは望んでいない。

(3) 男性、34歳、仏教徒、家族は妻と子供3人

- ・ 1994年にKNUに参加した。
- ・ 1999年に住んでいたカレン州の村で戦闘があり、すべての村民はタイへ避難した。
- ・ 2005年12月に妹とその家族がオーストラリアへ定住したので、自分たちの家族もオーストラリアへ定住することを希望しており、定住申請をした。インタビューはまだない。
- ・ 自分自身は教育年数が少ないが、子供たちに十分な教育の機会を与えてやりたい。

(4) 男性、32歳、スゴー・カレン族、5人家族

- ・ 家族は妻と息子1人、娘が2人であり、子供たちは皆キャンプで生まれた。
- ・ 1986年に自分の住んでいた村(スバロキ)にSPDCが来て村全体を焼きはらったため、自分自身は13歳であったが、KNUに参加して戦うことを決意した。
- ・ 1991年にマナブローでミャンマー軍と戦い、左腕、右目を負傷した。
- ・ 1994年に難民キャンプに来た。
- ・ キャンプでは幸せと感じているが、仕事がなく、また教育を終了しても活用できる機会がない。キャンプ内での役割は、セクションリーダーを務めただけである。自分自身はミャンマー国内での教育年数が4年しかなく、地位が低いと感じている。
- ・ 義理の妹(弟の妻)がオーストラリアにいる。
- ・ 子供たちにより高い教育の機会を与えてやりたいため、オーストラリアへ定住申請することを計画している。

(5) 女性、34歳、スゴー・カレン族、キリスト教徒、独身

- ・ ビルマ国内で生まれた。村がビルマ軍とDKBA軍に攻撃され、両親と6人の兄弟姉妹と共にタイに逃れてきた。ビルマでは強制労働、村の焼き討ち、戦闘などでいつも逃げ回っていた。
- ・ 自分自身は、教育をほとんど受けておらず、読み書きができない。教育・職業訓練を受けたいが、家事などで忙しく時間がない。(通訳した女性(KWOのメンバー)によると、2年前にキャンプ内で識字教育が始められたが、女性は家事などで忙しく受講者が徐々に減っている由。)
- ・ 1ヵ月前に姉とその家族がオーストラリアに第三国定住した。伯父(叔父)が長くオーストラリアに住んでいる。
- ・ 両親と弟、彼女自身の計4人で、現在オーストラリア政府に第三国定住を申請している。1回目のインタビューと健康診断を終え、最終インタビューを待っているがいつになるかは分からない。
- ・ 両親はビルマでは教師をしていたが、現在は歳をとっており、働いていない。
- ・ オーストラリアについては何も知らないし、何ができるかも分からないが、



ともかく学校には行かなければならないだろう。将来のことは何も分らないが、ここでは何もできないので良いチャンスだと思う。ビルマには帰ってもまた逃げることになるだけである。

- ・ 同席した彼女の父親は、オーストラリアに行ったら何がしたいかという問いに対し、何でもできることをやるだけと述べた。

(6) 女性、35 歳、スゴー・カレン族、キリスト教徒（バプテスト）、既婚（一度夫を戦争で失い、キャンプ内で再婚した）

- ・ 子供は女児 4 人（その内、最初の夫と 2 人、2 番目の夫と 2 人）
- ・ 現在家族 6 人で住んでいる。
- ・ ミャンマー東部の No Nee 村から来た。
- ・ ミャンマーでは夫と農業をしていた。兄は KNU の軍人であった。
- ・ ある日、夫がミャンマー政府軍に逮捕され、強制労働（灌漑建設）に徴用された。やがて夫が病気になると、政府軍の軍人は夫を殺した。その後、政府軍の軍人に 1 週間以内に、他の大きな村に移住するよう命令された。自分自身はそんなに早くは無理だと考え、タイへの避難を決断した。タイへは 3 日かけて、歩いて逃げて来た。
- ・ 1993 年にメーラ難民キャンプに到着し、以後 13 年間滞在。
- ・ オーストラリアへの第三国定住が決まったので嬉しい。家族 6 人全員で移住予定。オーストラリアでは友人が待っている。
- ・ オーストラリアがどんな国がよく分からないが、子どもたちにとってのチャンスであると思う。

## . 資料

- 1 . Thailand Atlas Map
- 2 . Resettlement of Myanmar Refugees By Country of Resettlement (1 January to 31 December 2005)
- 3 . Myanmar Thailand Border Refugee population by gender, As at end May 2005
- 4 . CCSDPT Agency Services To Burmese Border Camps June 2005
- 5 . Structure of Relief Assistance
- 6 . Structure of Refugee Camp Local Administration
- 7 . CAMP PROFILE: THAM HIN CAMP
- 8 . Tham Hin Temporary Shelter (In Brief)
- 9 . CAMP PROFILE: MAE LA CAMP
- 10 . MAE LA CAMP PROFILE THAILAND BURMA BORDER CONSORTIUM